

道内演劇に情熱燃やす 見応えある好漢だった

11日に60歳で死去した北海道演劇財団理事長で、俳優、演出家、脚本家の斎藤歩さん。舞台の出演、作、演出に加え、ドラマや映画にも多数出演し、若手の育成や環境整備などで道内演劇界をけん引してきた。その才能や人柄に、道内外で惜しむ声が広がっている。

斎藤歩さん死去 道内外で悼む声



斎藤歩さん(左)と沢則行さんが共演した芝居「カフカ経由 シスカ行き」＝2024年12月1日、幕別町(加藤哲朗撮影)

デジタルに
詳細



ある好漢だった。あまりにも早い死が残念でならない」などとコメントを寄せた。

同財団常務理事で劇作家・演出家の清水友陽さん(52)は2022年4月、同財団の芸術監督を斎藤さんから引き継いだ。道内演劇を支える財団にと情熱を燃やしなから、自分の意見を押し通さず相手を尊重する人だったと振り返る。今年10月に札幌座が上演するトルストイ「イワンのばか」で脚色・演出を務める。

「今年のシアターZOOの目玉になるから頼んだぞ、と託されました」

舞台出演は24年12月、人形劇師の沢則行さん(63)と小樽出身、チェコ在住と共演した「カフカ経由 シスカ行き」の十勝管内幕別町公演が最後となった。沢さんは「歩さん、今だってどうせ安らかに眠るわけもなく、天国と宇宙を大声上げて飛び回ってるんですよ？ ちょっと待ってて、まもなく行くから、また騒ぎましようや」と呼び掛けた。(山本哲朗、渡部淳)

元札幌交響楽団首席チエロ奏者の土田英順さん(88)は70歳のときに出会った斎藤さんの手ほどきで、役者として芝居4本に出演。28歳年下の斎藤さんを師匠と慕っていただけに「覚悟はしていたが悲しい。天国に行く順番が違つよ。昨年亡くなった親友の小澤征爾さんに続いて、また畏友を見送った」と肩を落とした。斎藤さんは、れんが造りである今年4月に解体された札幌市中央区の名物カフェを記憶に残す短編映画「Lakina(ラクナ)追憶」(仮題)の「店長」役で主演。同店の常連だった縁で出演を快諾し、2月24日から3日間、撮影に臨んだ。

藤嘉行監督(66)は十勝管内鹿追町在住。「大きな存在感のある方。消えゆくカフェに集う人々の思いに自身の覚悟も重

ねて演じられた。仮編集版は見てもらったが、ご存命のうちに完成させたかった」。

小説家、佐川光晴さん(60)は埼玉県在住。「学生時代からの付き合い。北大の新入生同士で、一目で大した奴だと思つたことをよく憶えている。歩は自分が俳優になつたのは偶々だと言いつているが、実に見栄えのする、なにより見応え